

## 論文

保育者養成校における障害理解教育に関する研究  
—保育学生の絵本の読み聞かせに対する捉え方—

萩原 はるみ

## I. はじめに

我が国においては、障害のある人や子どもが地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きることができる共生社会の構築に向けて、様々な取り組みが進められている。2012年には、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」が、中央教育審議会初等中等教育文科会（文部科学省）から示された。本報告において障害理解の推進に関しては、「1. 共生社会の形成に向けて」の（2）インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進のなかで、「障害者理解を推進することにより、周囲の人々が、障害のある人や子どもと共に学び合い生きる中、公平性を確保しつつ社会の構成員としての基礎を作っていくことが重要である。次代を担う子どもに対し、学校において、これを率先して進めていくことは、インクルーシブな社会の構築につながる」と提案されている。2012年の本報告に続いて、2013年には「障害者差別解消法」が制定し、我が国も2014年に「障害者権利条約」を批准した。これらのことよりインクルーシブな社会の構築のために、教育の果たす役割は大きいと言えよう。

その教育の現場である小学校や中学校における障害理解教育については、目隠しをして歩く視覚障害歩行体験や車いすに乗ったり押したりする車いす体験など、障害を疑似的に体験する障害疑似体験が頻繁に行われている（西館他, 2016）。さらに小野・徳田（2007）は、小学校、中学校、高校の教員を対象に行った調査において、障害理解教育で体験が行われているのは「言葉で教えるよりも体験する方がインパクトがある」「バリアフリーのあり方について考えさせたかった」などの理由からであることを明らかにしている。しかし、こうした障害疑似体験では、マイナスの効果をもたらすことが指摘されている。障害者の実際の姿とは異なる体験や「できないこと」ばかりを感じる偏った体験を持つことなどが挙げられる。たとえば視覚障害の疑似体験では、初めて目が見えない状態になった参加者が、見えないことに慣れない中でさまざまな体験をもつために、失敗したり困難を感じたりすることを繰り返す（西館 2005; Silverman et al., 2015）。つまり、目の見えない状態に慣れている視覚障害者の体験をしているというよりは、単にいきなり目隠しをされた体験をしているわけである。そのため、特に目隠しをして歩く体験では不安や恐怖が強く喚起されることになる（小野・徳田, 2006）。常に目を使って生活をしている者が視覚障害者の立場に立とうとしても、「自分は目が見えなかったら一歩も動けないから、視覚障害者が一人で生活するのはむずかしい」というように、その能力や困難さを自分本位にとらえてしまう（西館ら, 2016）。さらに西館ら（2016）は、視覚障害歩行体験と車いす体験を通じて、次のような問題点を指摘している。1つ目は、体験しさえすれば何かを学び取ることができるというスタンスに立っていると体験の目的がぼやけて参加者が必要なことを学び取れたかを検証することができない。2点目として、出来ないことばかりを体験して終わると参加者が障害者の能力を低く評価することになりかねない。3

点目に、参加者は体験によって適切な情報ばかりを得るわけではないため、体験を行った後に体験をもとに話し合ったり、体験知（体験で得た情報）についてフォローを行う時間を設ける必要がある。4点目には、指導者の指導技術を高める必要性を指摘している。

以上は、市町村における対象が小学1年から一般成人までの福祉体験講座の実施から見えてきた問題点である。小学校高学年や一般市民対象であってもこのような問題点が浮上してきていたわけであり、ましてや幼児期の子どもたちには、障害疑似体験を通じて障害理解を進めるのは難しいと考えられる。では、保育の場における障害理解教育はどのように実践していったらよいのであろうか。保育者養成校においては、障害理解教育をどのように取り組んでいけばよいのであろうか。

障害のある人も障害のない人も共に生活する社会を形成するためには、幼児期からの障害理解教育が必要であり、障害者が登場する絵本の読み聞かせが障害理解教育に有効であることが確認されている（水野，2010）。しかし、障害理解教育に有効な教材、教具を用いれば、誰もが障害理解指導を有効に行うことができるのではなく、その教材、教具を適切に使用することが必要不可欠になると徳田（1994）は指摘している。絵本の読み聞かせに関しては、読み手が内容をどのようにとらえているかによって子どもの社会的マイノリティに関する理解に大きく影響すると思われる。

そこで本研究においては、保育科の学生（以下、保育学生と表す）を対象として、障害をテーマとした絵本の中のある場面における感情、読み聞かせを活用した指導をすることについての意識や戸惑い等について調査し、保育者養成校における「特別支援教育」の授業の中で障害理解教育に取り組んでいくための資料を得ることを目的とする。

本研究は、絵本『さっちゃんのまほうのて』を用いた障害理解教育の先行研究を多数発表されている水野（2008）の研究を参考にし、保育学生を対象として進めたものである。

## Ⅱ. 保育者養成校の学生の『さっちゃんのまほうのて』の読み聞かせに関する捉え方

### Ⅰ. 方法

#### (1) 調査対象者

愛知県内のN短期大学保育科2年生で「特別支援教育」の授業を受講した学生131名を対象とした。調査対象の内訳は、男性1名、女性130名であった。アンケート調査を実施した時期までに、教育実習Ⅰ、教育実習Ⅱ（コロナの関係で一部学生は未実施）、保育実習Ⅰを経験している。

#### (2) 調査手続き

「特別支援教育」の最終授業時にYouTubeによる『さっちゃんのまほうのて』の読み聞かせを視聴した後、質問項目の回答を求めた。調査期間は、2020年7月下旬から8月上旬であった。

#### (3) 用いた絵本

読み聞かせに用いた絵本は『さっちゃんのまほうのて』（田畑精一・野辺明子・志沢小夜子・先天性四肢障害児父母の会共同制作著、偕成社、1985年）であった。『さっちゃんのまほうのて』は、障害理解教育の教材として、教育現場で広く使用されているという点で評価されている（徳田1993、徳田1994、水野2005）。

#### (4) 調査項目

水野（2008）の保育者を対象とした調査項目を用いた。絵本の中にある場面の保育者の感情に関する項目5項目、読み聞かせに関する項目5項目、計10項目で交際されている。

#### (5) 倫理的配慮

アンケート記入にあたっては、授業評価には影響しないこと、及び、授業内容研究以外には使用しないことを説明し、同意を得た学生に対し実施した。

## 2. 結果と考察

### (1) 障害を扱った場面における感情に関して

図1に、主人公が友だちに「手のないおおかあさんなんてへんだ」と言われた場面を読んで、どのように感じたかを尋ねた結果を示した。

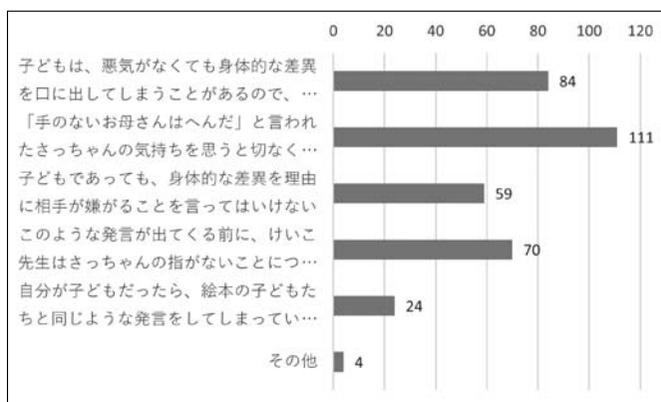


図1（全体の%の母数は131名）（複数回答）

最も多かったのは「手のないお母さんはへんだと言われたさっちゃんの気持ちを思うと切なくなる」（85%）であった。学生自身がこの場面を読んで情動的に強く揺さぶられたことが伺われた。また「このような発言が出てくる前に、けいこ先生はさっちゃんの指がないことについて、クラスの子どもたちにきちんと説明しておくべきだった」と回答した者も53%と高かった。保育者を対象とした水野（2008）の研究においても、保育経験の浅い保育者の方が「障害が原因となってトラブルが発生する前に担任の先生が指導捨ておくべきであった」との考えを持つ傾向が強く、保育歴15年以上の保育者では本項目に回答した保育者は13%にとどまっていたとの報告から、保育経験との関連がうかがわれた。保育経験を積み重ねる中で、「〇〇すべきである」という捉え方から、状況や子どもに応じて柔軟に対応していけばよいという見通しと余裕が持てるようになってくるが、現場での保育経験のない学生は、こうした発言を好ましものではなく、指導しなければならないと捉えている傾向が強いことが推測された。

図2には、「手のないお母さんなんてへんだ」と主人公が言われた場面において、自分が主人公の担任（けいこ先生）であったら、どのように対応すると思うかについて尋ねた結果を示した。

保育者養成校における障害理解教育に関する研究

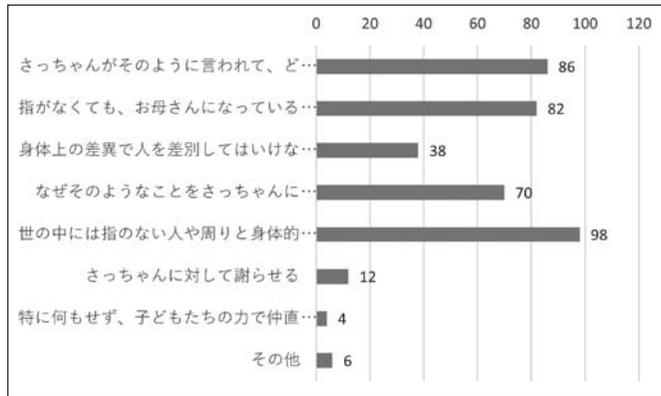


図2 (全体の%の母数は131名) (複数回答)

最も多かったのが「世の中には指のない人や周りと身体的な特徴に違いがある人がいることを伝える」(75%)であった。保育者を対象とした水野の調査においても、保育経験が浅い保育者ほど、本項目に回答しているものが多かった。学生および保育経験の浅い保育者は「さっちゃんのまほうのて」の絵本を広い意味での障害理解ではなく、身体に障害のある人に視点を当てた用方を念頭においている傾向が強いと推測された。また、「さっちゃんがそのように言われて、どのような気持ちになったかを考えさせる」(66%)と、「指がなくても、お母さんになっている人がいることを伝える」(63%)と回答した者の約半数が「世の中には指のない人や周りと身体的な特徴に違いがある人がいることを伝える」の項目とを合わせて選択していた。これは、障害に関するイメージを変容させる情報提供をするだけでなく、相手の気持ちを考えた行動を促すための指導も大切であると考えている学生の割合が高かったという点では、水野の研究における、保育歴との間で統計的に優位な差は認められなかったという結果と一致していた。

図3には、主人公の母親が主人公に障害の原因を伝えた場面を読んでどのように感じたかについて尋ねた結果を示した。

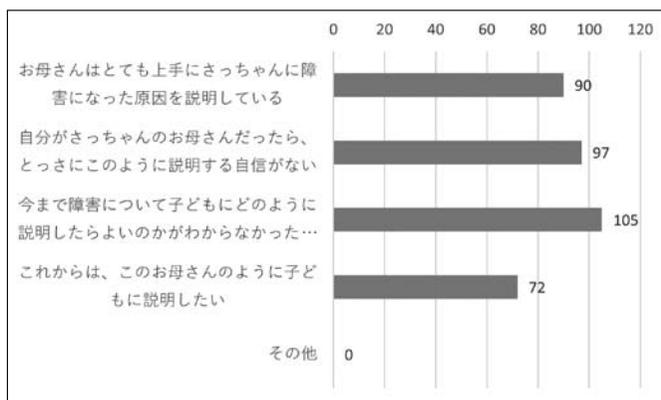


図3 (全体の%の母数は131名) (複数回答)

その結果、「自分がさっちゃんのお母さんだったらとっさにこのように説明する自信がない」と不安を示した学生が74%を占めたが、その多く（60%）の者が複数回答として「今までに障害についてどのように説明したらよいかかわからなかったが、お母さんの説明の仕方を見て、ヒントを得た」と回答していた。またこの後者の回答は全体の80%を占めており、絵本を通じてお母さんの説明の仕方から、学生自身が学びを深めることができたということが伺われた。また、「お母さんはとても上手にさっちゃんに障害になった原因を説明している」と回答した者も69%おり、多くの学生がさっちゃんのお母さんがさっちゃんに正直に障害の原因を伝えたことを肯定的にとらえていると言える。さらに幼児期に障害について、このようにきちんと伝えることは必要であることを学んだのではないかということが推測された。

図4には、主人公に対して「大きくなっても指がはえてこない」と説明したことについてどのように感じたかについて尋ねた結果を示した。

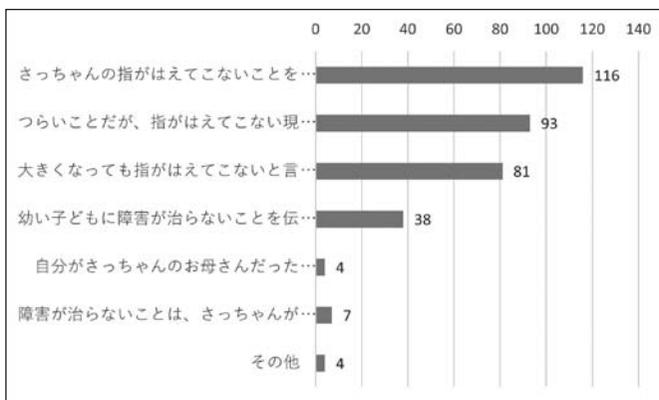


図4（全体の%の母数は131名）（複数回答）

図4によると、「さっちゃんに指がはえてこないことを伝えたお母さんは、とてもつらい気持ちだったと思う」（89%）、「大きくなっても指がはえてこないと言われたさっちゃんの気持ちを考えると切ない」（62%）から、さっちゃんの母親やさっちゃん自身の気持ちに共感するものが多かった。一方で、「つらいことだが、指がはえてこない現実を直視させることが障害を受容するうえで必要である」（71%）と考えるものも多く、「幼い子どもに障害が治らないことを伝えるのは酷である」（29%）、「障害が治らないことは、さっちゃんがもう少し大きくなってから伝えたほうが良かったと思う」（5%）という障害の永続性を伝えたことに否定的な考えを示したものは少なかった。この結果も保育者を対象とした水野の報告と同様であった。

図5には、主人公に意地悪を言った幼稚園の友だち（あきらくん）が主人公に謝りに来た場面についてどのように感じたかを訪ねた結果を示した。

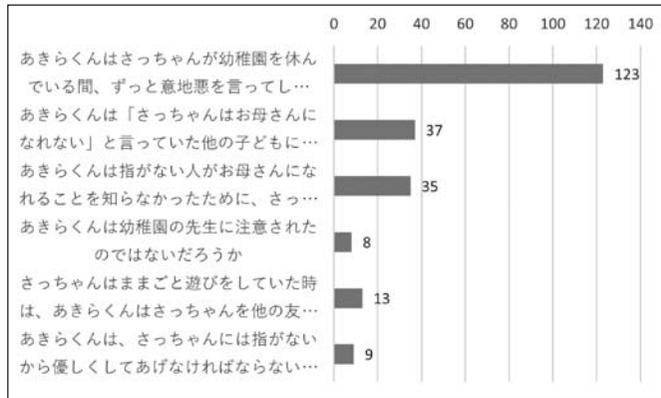


図5 (全体の%の母数は131名) (複数回答)

「あきらくんはさっちゃんが幼稚園を休んでいる間、ずっと意地悪をやってしまったことを後悔していただろう」(94%)と、あきら君の気持ちに共感する回答がほとんどを占めていた。

## (2) 読み聞かせに関する意識について

保育活動の中で「さっちゃんのまほうのて」を子どもたちに読み聞かせたいと思うかについて尋ねた結果を図6に示した。その結果、「ぜひ読み聞かせたい」(33%)、「機会があれば読み聞かせたい」(59%)で、両方を合わせると92%であった。水野の保育者を対象とした調査結果では、「ぜひ読み聞かせたい」が61%と最も多かったのに対して、学生の回答は「機会があれば読み聞かせたい」の方が上回っており、やや消極さが伺われる。「あまり読み聞かせたくない」は2%、「絶対に読み聞かせたくない」と考えている学生は皆無であった点から、本書を肯定的に受け止めていることが推測された。

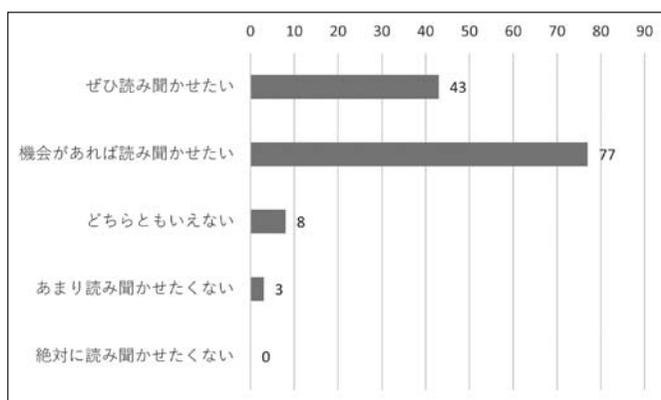


図6 (全体の%の母数は131名) (複数回答)

図7には、「さっちゃんのまほうのて」を保育活動の中で「ぜひ読み聞かせたい」、「機会があれば読み聞かせたい」と回答した者に対して、なぜそのように考えたかについて理由を尋ねた結果

を示した。図7によると、「世の中に障害がある人がいることを子どもたちに気づかせたいから」(62%)、「思いやりの気持ちを育てることができると思うから」(62%)を選択した者が多かった。また、「さっちゃんのような指のない友達がクラスにいても、仲良くできるように教えていきたいから」も50%を占めていた。水野による保育者の回答では29%にとどまっていたが、学生は半数のものが選択していた点からは、学生はこの選択肢の中の「仲良くできるように教えていきたい」という表現に反応したのではないかということが推測された。

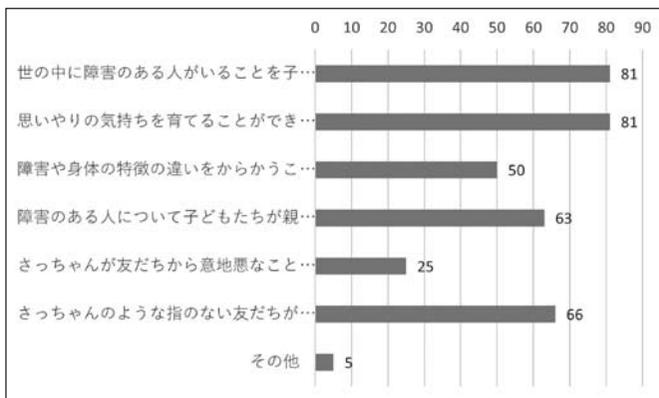


図7 (全体の%の母数は131名) (複数回答)

次に「さっちゃんのまほうのて」の読み聞かせを活用した障害理解指導に関する戸惑いについて尋ねた結果を図8に示した。

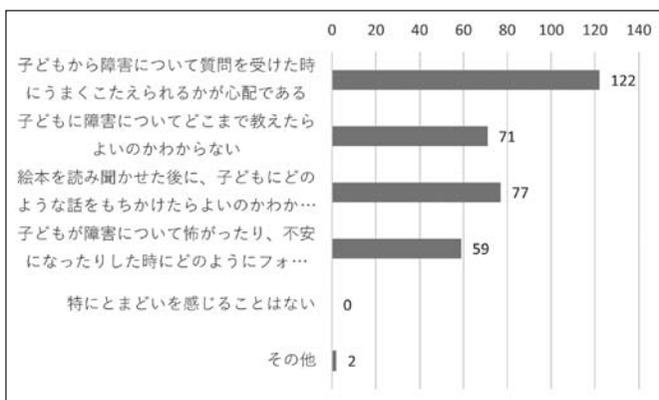


図8 (全体の%の母数は131名) (複数回答)

「子どもから障害について質問を受けた時にうまくこたえられるかが心配である」が92%で、その半数のものが、「子どもに障害についてどこまで教えたらよいかかわからない」(54%)、「絵本を読み聞かせた後に、子どもにどのような話をもちかけたらよいかかわからない」(59%)、「子どもが障害について怖がったり、不安になったりした時にどのようにフォローしたらよいかかわらな

い」(45%)を選択していた。「特に戸惑いを感じることはない」と考えている者は皆無であった。学生は絵本を読み聞かせた後の指導方法がわからず、自信が持てていないことが明らかとなった。

図9には、「さっちゃんのまほうのて」を読み聞かせた後に子どもたちにどのような指導をすると思うかについて尋ねた結果を示した。

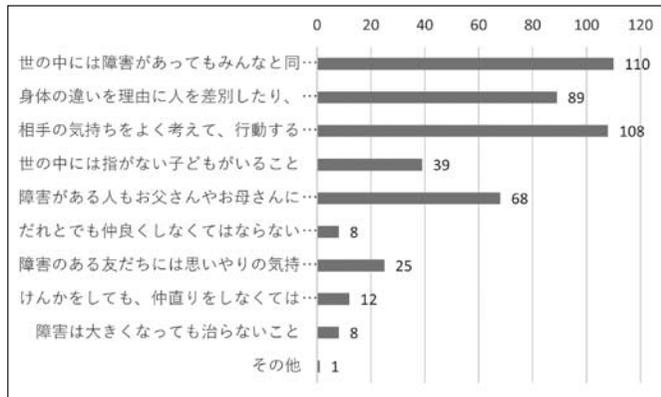


図9 (全体の%の母数は131名)(複数回答)

「世の中には障害があってもみんなと同じように生活している人がいること」(84%)、「相手の気持ちをよく考えて行動する」(82%)が多かった。次いで「身体の違いを理由に人を差別したり、意地悪をしてはいけないこと」(68%)、「障害がある人もお父さんやお母さんになれること」(52%)であった。水野(2008)によると、幼児期の障害理解指導では、様々な障害のある人が世の中に存在していることを伝えることによって子どもが障害者に対するファミリアリティを高め、障害者が自分と同じような生活をしていることを子どもが実感できるようにすることが重要である。しかし、ただ単に、口頭で「障害のある人もみんなと同じように生活している」と伝えるだけでは障害理解教育の効果は薄いと述べている。幼児期の子どもたちには、「誰とでも仲良くしなくてはならないこと」、「障害のある友だちには思いやりの気持ちをもたなくてはならないこと」などの漠然とした具体性に乏しい指導内容では、表面上は子どもたちにその内容が伝わったかのようにみえても、実際には障害児とどのように接すれば良いのかについては、伝わっていないことがほとんどであろう。

さらに、「障害は大きくなっても治らないこと」という障害の永続性を子どもに伝えることは幼児期の障害理解教育において非常に重要な課題であると水野は述べている。保育学生は障害の永続性について選択した者は6%のみであった。この点も授業においても課題とされた。

最後に「さっちゃんのまほうのて」を読み聞かせた後、保育活動の中でどのように活用していきたいかについて尋ねた結果を図10に示した。

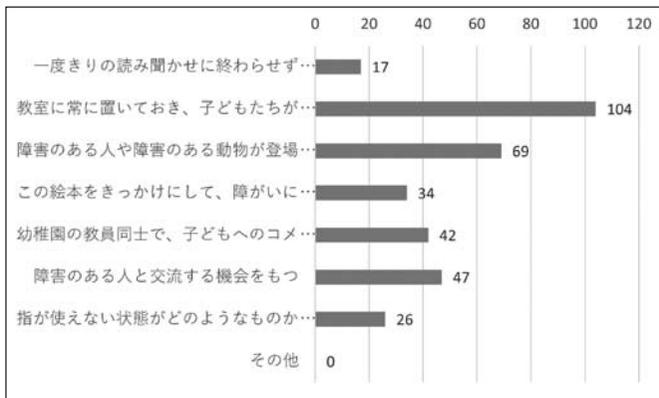


図10 (全体の%の母数は131名) (複数回答)

最も多かったのは「教室に常においておき、子どもたちが自由に読めるようにしておく」(79%)であった。水野の保育者を対象とした調査では、「一度きりの読み聞かせに終わらせず、何度も繰り返して子どもたちに読み聞かせる」が最も多く64%であったのに対して、保育学生は本項目を選択した者は13%にとどまっていた。これは、現任保育者の多くは実際に障害児の担任経験を通じて、「さっちゃんのまほうのて」の絵本活用は、障害児理解教育に有効であることを実感しているからであろうと推測された。

アンケート終了後、『さっちゃんのまほうのて』の絵本を読んで感じたこと、気づいたことなどを自由記述してもらった。以下のような感想が多かった。

1. お父さんやお母さんの言葉を聞いて、こういう伝え方もあるということを学んだ。お父さんやお母さんのことばがさっちゃんに大きな影響を与えたように、保育者のことばも大きな影響を与えるということを知り、責任を感じた。
2. 言葉の選び方や伝え方が難しい。偏見を持たせないような伝え方は難しい。少し怖くなった。自分には自信がない。自分が選んだ言葉が子どもには理解できているか？例えば「個性」という言葉？このような事を考えなければいけないことに気づいたが、それだけに伝え方が難しい。
3. 障害を持っているのがどうしてかと聞かれてもどのように答えたらいいのか考えたこともなかった。答え方も全く分からなかった。こういうことを考えることの必要性・大切さに気付かされた。
4. 事実をわかりやすく、子どもが傷つかないように言葉を選んで伝えることが大切であるとわかった。
5. 障害について、自分だったらどう伝えるか、課題を通じて考えたが、良い考えが出なかった。しかし、お母さんの話し方が正直でさっちゃんにも伝わる話し方だと感じた。正直に伝えることの大切さを学んだ。
6. 伝え方によって子どもの障害への考え方や理解の仕方が変わってくるのだと思った。
7. 自分のことばでは伝えきれないことを伝えるために、この絵本を活用したい。読み聞かせたい。
8. 絵本を見る前までは、子どもに説明するときは上手にごまかして障害について伝えることが子

どもたちのためだと思っていたが、正直に伝えることが子どもたちも障害について学ぶ機会であり、人に対しての思いやりの気持ちをもつことが大切だということを学ぶ機会になるということも学んだ。こういう機会を通じて、偏見や差別がなくなっていくのだと思った。

9. 障害や多様性について、子どもの頃から少しずつ知っていくことが大切だと思った。
10. 読み聞かせをすることによって、自分の周りに難しいことがある子がいることや、みんなと同じ体を持っているわけではないことを伝える一つの方法になることを学んだ。読み聞かせは良い方法だと思った。
11. 「障害＝かわいそう、何もできない」ではない。決めつけてはいけない。
12. 障害は生まれつき持ったものであるため、その子にとっては普通のことであるということに気づかされた。
13. 「特別支援教育」は自分には関係のない科目だと思っていたが、この絵本を通じて大切さを認識した。
14. 障害についてもっと勉強したくなった。

### Ⅲ. まとめ

保育学生を対象とした『さっちゃんのまほうのて』の読み聞かせに関する調査を、保育者を対象とした水野（2008）の先行研究結果と比較しながら考察してきた。その結果、保育学生は、子どもたちの障害理解教育に『さっちゃんのまほうのて』の絵本は適切な絵本であると考えてはいるが、読み聞かせ後の指導方法に戸惑いを感じており、自信を持てずにいることが明らかとなった。それは保育活動の中での『さっちゃんのまほうのて』の活用法を尋ねた項目で、「一度きりの読み聞かせに終わらずに、何度も繰り返して子どもたちに読み聞かせる」と回答した者が、保育者では64%であった（水野，2008）のに対し、保育学生は13%と少なかった点からもうかがえる。

また障害理解教育においては、有効な教材、教具を用いられれば障害理解指導を有効に行うことができるのではなく、その教材、教具を適切に使用することが必要不可欠になる（徳田、1994）。すなわち、いくら有効な教材、教具を使用しても、自信が持てず戸惑いを感じながらの指導では、聞き手である子どもたちの障害に対する捉え方は歪むことになる。この点からも絵本を教材として用いるときの保育者の指導の在り方は重要と言える。保育者のことばは子どもに大きな影響を与えるため、保育者はしっかりと教育的意図をもって絵本を読み聞かせることが大切である。アンケート終了後の『さっちゃんのまほうのて』の絵本を読んで感じたこと、気づいたことなどの自由記述からは、今回の調査を通じて障害に関する絵本に触れ、多くの気づきや学びを深めてもらったことが伺われる。「特別支援教育」の授業においては、今後も時間の許す限り障害に関する絵本を取り上げ、読み聞かせ後の指導方法について、教員が正答を示すのではなく、子どもたちの反応を予想しながら学生同士がディスカッションを深めていくことが良いと考える。

今回の調査は「特別支援教育」の授業の中で障害理解教育に取り組んでいくための手掛かりを得る第一歩の調査であった。本年度は学生との対面授業が実施不可というコロナ禍での調査であったため、当初予定していたアンケート回答をもとにしたディスカッションの実施は不可能となってしまった。それが実現できる日が一日でも早く来ることを祈っている。今後は、本アンケート結果をもとに学生間でのディスカッションを通じて学生の気づきや学びを深めるとともに、引き続き障害

理解教育の在り方の手掛かりを深めていくことが課題とされた。

注）本研究では「傷がい」の「がい」の文字を「害」で統一した。

## 【引用・参考文献】

- 望月珠美・水野智美・徳田克己（1998）幼児期に明ける福祉教育・障害理解教育への取り組みに関する考察，日本保育学会大会研究論文集 51，874-875.
- 藤田久美・大石由起子・角田憲治・永瀬開（2018）特別支援教育における障害理解教育のあり方—福祉教育の視点を包含した教育実践—，山口県立大学学術情報，11，（社会福祉学部紀要 24）39-49.
- 林慎吾・岡田有司（2020）発達障害理解教育を通じた大学生の発達障害に対する態度変容—顕在的及び潜在的指標に注目して—，障害理解研究，20，1-13.
- 前嶋元（2015）保育者養成校における障害理解教育の必要性の気づきを促す教育実践—障害をテーマにした絵本『さっちゃんのまほうのて』に関する同学年の学生への意識調査の実施・分析を通して—，小池学園研究紀要，13，45-54.
- 松本猛（2015）障害者教育，『絵本と社会』，114-123.
- 水野智美（2005）絵本『さっちゃんのまほうのて』を用いた読み聞かせによる幼児の障害理解教育の効果，読書科学，49(1)，1-11.
- 水野智美（2005）人形遊びを通じた障害理解教育指導の効果—車いすの人形を用いた遊びの観察を通して—，障害理解研究，7，1-6.
- 水野智美（2008）幼児に対する障害理解指導，文化書房博文社.
- 水野智美・埴和明・徳田克己（1999）保育者養成校の学生の幼児に対する障害理解教育に関する研究，日本教育心理学会第41回研究大会論文集 398.
- 水野智美（2010）発達障害が登場する絵本の内容分析—幼児に対する障害理解指導の視点から—，障害理解研究，12，9-18.
- 南野奈津子・田尻由起・早坂聡久・嶋寄博嗣・中原恵美・田村知栄子（2019）幼児期における障害理解教育の実践上の課題に関する調査研究，東洋大学ライフデザイン学研究 14，139-152.
- 西館有沙・水野智美・徳田克己（2015）小学校における発達障害理解指導の現状と課題—教員は子どもたちに発達障害児のことをどのように伝えよとしているか—，障害理解研究，16，1-10.
- 西館有沙・水野智美・徳田克己（2016）地域で実施されている福祉体験講座の問題点と改善策の提案—視覚障害歩行体験と車いす体験に焦点をあてて—，障害理解研究，17，1-16.
- 西館有紗（2005）間違った障害理解教育 I—苦労の協調・安易なシミュレーター体験・美談仕立て—，徳田克己・水野智美著『障害理解—心のバリアフリーの理論と実践—』，誠信書房，110-116.
- 中村義行（2011）障害理解の視点—「知見」と「かかわり」から—，佛教大学教育学部学会紀要，10，1-10.
- 小川圭子・水野智美（2009）保育者養成校で扱われている発達障害に関する内—発達障害に関する信認保育者の知識と困り感との関係から—，障害理解研究，11，11-17.
- 小野・徳田克己（2006）視覚障害歩行シミュレーション体験が体験所の不安、恐怖に与える影響—障害理解の視点から—，障害理解教育研究，8，37-46.

- 小野聡子・徳田克己（2007）学校教育における視覚障害シミュレーション体験の実施状況とその内容, 障害理解教育研究, 9, 83-92.
- Silverman A. M., Gwinn J. D. & Van Boven L. (2015) Stumbling in Their Shoes: Disability Simulations Reduce Judged Capabilities of Disabled People, *Social Psychological and Personality Science*, 6(4), 464-471.
- 鷹野遥香・吉井勘人（2017）小学生への障害理解を促す試み—絵本の読み聞かせと話し合い活動を通して—, 教育実践学研究, 22, 193-206.
- 田村知栄子・嶋寄博嗣・中原恵美・田尻由起・早坂聡久・南野奈津子（2019）幼児期における障害理解教育の実践実態に関する調査研究, 東洋大学ライフデザイン学研究, 14, 149-160.
- 徳田克己（1993）絵本のマイノリティ：幼児に対する福祉教育の教材としての可能性を求めて, 視覚障害心理・教育研究, 10, 15-21.
- 徳田克己（1994）障害理解における絵本『さっちゃんのまほうのて』の読み聞かせの効果, 読書科学, 38(4), 153-161.
- 徳田克己（1997）障害理解における絵本『さっちゃんのまほうのて』の読み聞かせの効果(Ⅱ)—ハッピーエンドに対する期待と障害の永続性に関する認識の発達的变化—, 読書科学, 41(1), 9-141.
- 徳田克己・水野智美（2005）障害理解—心のバリアフリーの理論と実践, 誠信書房, 2-14.
- 柳田邦男（2020）ゆびがなくても、おかあさんになれるんだ『人生の1冊の絵本』, 3-8.

## **A Study of Education for Understanding Disabilities for Students of Early Childhood Education and Care: Deepening of Their Understanding Through Reading Picture Books Aloud**

Ogiwara, Harumi\*

障害のある人も障害のない人も共に生活する社会を形成するためには、幼児期からの障害理解教育が必要であり、障害者が登場する絵本の読み聞かせが障害理解教育に有効であることが確認されている（水野，2010）。本研究においては、保育科の学生を対象として、障害をテーマとした絵本「さっちゃんのまほうのて」の中のある場面における感情、読み聞かせを活用した指導をすることについての意識や戸惑い等について調査し、保育者養成校における「特別支援教育」の授業の中で障害理解教育に取り組んでいくための資料を得ることを目的とした。本調査から、保育学生は子どもたちの障害理解教育に「さっちゃんのまほうのて」の絵本は適切な絵本であると考えてはいるが、読み聞かせ後の指導方法に戸惑いを感じており、自信を持てずにいた。「特別支援教育」の授業においては、絵本を読み聞かせた後の指導方法について取り上げていくことの重要性は明らかとなった。

キーワード：障害理解教育, 絵本の読み聞かせ, 保育学生, アンケート調査

